語る聞く

SSW―Net代表

郭　理恵さん 42

子ども輝く環境作り

学校から地域、社会を変えたい

浜井孝幸撮影

かく・りえ　1975年、大阪市生まれ。2006年大阪府SSW、08年からチーフSSW。12年にSSW-Netを設立し、代表に就任。15年から大阪人間科学大人間科学部社会福祉学科助教。府内の複数の市でSSWや事業全体に助言するスーパーバイザーも務める。社会福祉士。

虐待、貧困、いじめ――。学校で児童生徒のわずかな兆候から問題の背景を探り、家庭や地域、行政に働きかけて子どもの生活環境を改善するのがスクールソーシャルワーカー（SSW）だ。まだ広く知られていなかった十数年前から務め、仲間同士で学ぶSSW―Netを設立した郭理恵さん(42)は、「子どもを取り巻く人たちをつなぎ、生き生きと育つための環境をつくりたい」と話す。

（生活教育部　宮原洋）

「学校を歩き回っていると、問題を抱えている子が出すサインに気付きます。毎日同じ服を着ていたり、髪がべたべたしていたり。背景を探ると、親のネグレクト（育児放棄）や貧困があります。背中に足跡がついている子もいた。その子は学校でいじめられていました」

スクールカウンセラーが児童生徒に直接働きかけるのに対し、SSWは子どもの周囲に働きかける。2004年に大阪府南部の市で学校相談員になり、06年には府のSSWにも任命され、複数の小中学校を巡回。当初は仕事内容が知られておらず、教職員に理解してもらえないこともあった。

「『虐待は児童相談所に通告する義務がある』と説明しても、学校側は『親御さんを売ることになる。少し話を聞いてきてくれたらいい』と。でも、保護者が学校にどなり込んでこようが、毅然と対処すべき時もある。それが支援のスタートになります」

国が自治体にSSWの費用を補助する制度を導入した翌年の09年、仲間4人で勉強会を始め、12年に「SSW―Net」を設けた。

「それぞれの職場である学校には相談できる同僚がおらず、孤独感を抱える人が多かった。SSW同士がつながり、学び合う必要がありました」

連続講座などを企画し、東京や愛知でも交流会を開いた。これまでに全国から延べ約1000人が参加した。

ソーシャルワーカーと初めて出会ったのは、設計会社の事務員だった20歳代前半の頃、父親が脳卒中で倒れて入院した病院だった。障害者手帳の申請方法や活用できる制度などについて丁寧に教えてくれた。

「一家の大黒柱が倒れ、家族は生活していくので精いっぱいだったから、ありがたかった。こんなふうに生身の人間に関わる仕事をしたいと思いました」

大学に編入して社会福祉を学び、会社を退社。児童養護施設でボランティアをしていた時に、虐待を背景に抱える子どもの多さに驚いた。

「施設に来る子を減らすにはどうすべきかと考えて、学校に行き着きました。地域の子なら誰もが通える学校で関われば、もっと早い段階で何かできるんじゃないかって」

ただ、早期に兆候を見つけられても、解決は容易ではない。08年から府チーフSSWを務め、手応えと難しさに直面してきた。

ある中学校に乱暴に振る舞い、家出を繰り返す男子生徒がいた。ひとり親世帯で、父親は「俺は関係ない」と息子に無関心。話を聞くと、仕事がうまくいっていないことがわかった。父親の相談に乗り、学校の教師には「親に要求するばかりでなく、ねぎらって」と求めた。その後は、生徒が問題を起こして家庭裁判所から呼び出しがあると、父親が進んで毎回付き添った。

「生徒の乱暴な行動はその後も続きましたが、家出はしなくなりました。そっぽを向いていた親が変われば、子も変わる可能性がある。わずかな変化に根気強く寄り添っていくのが、私たちの仕事です」

文部科学省は約4000中学校区に配置している約1700人(2016年度)のSSWを増やし、19年度までに全1万中学校区への配置を目指す。各自治体の研修なども充実してきており、SSW―Netは来年3月、発展的に解散する。

「今後はそれぞれが学んだことを各地に持ち帰り、学校や地域でネットワークをつくって、取り組みを広げてほしい。私も力になれるなら、ノウハウを伝えていくつもりです」

SSWは非正規職員で収入が安定せず、なり手不足は深刻だ。社会福祉士などの資格が必須でなく、専門性にばらつきもある。人材養成と専門性向上のため、15年度に大学教員になり、教え子2人をSSWとして送り出した。いじめや虐待などで壊れた人間関係を修復する手法を研究中だ。

「社会のひずみが、立場の弱い子どもの行動となって現れる。子どもの周りにいるみんながサポーターになるように環境を整え、学校から身近な地域、さらには社会を変えていきたい」

取材後記

教員側はSSWと接することで、何が変わるのだろうか。

中国地方の高校の女性教諭によると、子供にスマートフォン（スマホ）を与えながら教材費を滞納する保護者を、「モラルに欠けている」とかつては感じていたという。同校のSSWと話をするうちに、教員の間で問題の背景に関心が向くようになった。ある母親に尋ねると、ひとり親で家計が苦しく、自らの電話回線は止められていた。「子供には惨めな思いをさせたくなかった」。親心ゆえのスマホ。「踏み倒すつもりはない」とわかり、教材費の分割払いを提案した。

取材の際、郭さんは「学校の可能性は大きい」と言った。教員とSSWが子どもの幸せに向けて力を合わせるのが当たり前になったとき、学校は大きく変わるのだろう。